

氏名	かな やま ゆ み 金 山 由 美
学位(専攻分野)	博 士 (教 育 学)
学位記番号	論 教 博 第 119 号
学位授与の日付	平 成 17 年 11 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	心 理 療 法 と 「世 界 観」

論文調査委員 (主 査) 教授 岡 田 康 伸 教授 藤 原 勝 紀 教授 河 合 俊 雄

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、著者の日ごろの臨床経験を背景に、1 調査研究と 3 事例を含む 4 部（9 章）よりなるものである。

第 1 部は心理的領域における「世界観」についてと題され、3 章よりなる。ここでは、人が生きる上で、「世界観」がいかに重要であるかを概観した。絵画や文学といった人間の内的状況が直接的に表現される領域を通して、人と世界観の結びつきの深さについて論じられた。また、西洋思想の中で、世界観を扱う際に必須要件となる「主体」と「客観的世界」が近・現代思想の流れの中で、どのように捉えられてきたかが概観された。デカルトの思想に始まる主一客二元論に続き、デカルトの世界観に対する批判を通じて生じてきた、主体と客観的世界の相互関係と言う視点にも触れられた。この視点に基づき、現象学的立場に立つ精神医学者たちにより議論されてきた客観世界の 2 つの大きな特徴について、すなわち、現実感：おのずからわかっていることと一般的感覚：だれにでもわかることがとりあげられた。第 3 章では近年の臨床心理学および心理臨床領域において「世界観」というテーマがどのように捉えられているかという点から、臨床心理学における現実感の捉え方、とりわけ外的現実に対する内的現実の重要性や両者のバランスのありようについて問題が提起された。多様で変化の早い現代社会を生きるうえでは、固定的な現実感にとらわれすぎないあり方が、有益かもしれないことを健常者レベルでの実証的データに基づいて考察された（調査研究）。心理療法において対象とされる人々のあり方の多様性に目を向けることの重要性を指摘し、第 2 部への導入とされた。

第 2 部は心理療法における「世界観」と題され、2 章より構成されている。ここではまず、第 1 部で述べたような、人と世界観の関わりが具体的に表現されたものとして神話・物語に焦点が当てられた。かつて人は共同体が提示する伝統的な世界観に則して生きていたが、近代以降その影響が低下してきていること、「神話・物語の役割」ではそういった人と世界観の長く深い関わりを具現したものとしての神話・物語の重要性が指摘された。神話に同一化して生きていくことが殆ど不可能となった現代人にとって、自分が何者でどう生きていけばいいかを確かめることなく生きることは難しく、心理療法という営みの中でその手がかりを見出そうとする動きが展開されていることに触れられた。心理療法は個々のクライアントの神話あるいは物語が生まれ、生成していくこと、そしてそのことがクライアントの世界観を深い関係性の中で取り戻させることにつながるであろうという本論文における著者の中核的な考えが示された。

心理療法が対象とする「病」や「病むこと」自体も、時代の世界観の中で位置づけられていること、そして「病」を、病む人自身の「世界観」からとらえ理解していく視点が、「病む個人」の生のリアリティーにより近づくことを可能にするであろうと主張された。

第 3 部は心理療法過程にみる「世界観」と題されて、2 章よりなる。ここでは、実際の心理療法過程にてらしながら、「世界観」のテーマが論じられた。現代人にとっての「世界観」はより重層的で全体的な世界を構築するようなものである必要があると指摘された。心理療法の中で「世界観」のテーマがどのように問題とされ展開されてゆくか、その際、心理療法における何がそのような展開を可能にするのかを、「心理療法の場—関係性と開かれた世界」を重視し、心理療法の場がクライアントと心理療法家双方の意識的・無意識的なものの触れ合いによって、多様な関係性が生み出される可能性が潜在

する場であることが確認された。自らの世界観を生きることが難しくなっている、あるいは自分の世界観を見失っているクライアントがまさに「生きて目の前にいる」心理療法家との関係を通じて自らと向かい合ってゆくことこそが個々のクライアントにとっての多様な「治癒」のあり方と、それが深い関係性の中で体験されると論じられた。著者はこれらをさらに論じていくために3事例を提示した。

1つめの事例は「抑うつ状態の中年期女性」で、ひとりの現代人であるクライアントの語りや世界観がどのように変化して「わたし」となっていったかを跡付けるとともに、そこで求められる心理療法家の態度についても論じられた。心理療法家自身が自分の物語とは異なる物語、異なる世界観があることを知ることが心理療法家の好みの物語にいたずらにクライアントを巻き込むような無自覚な物語へのとらわれを避け、語る行為の持つ力を治療的方向へと発現させるのであると主張された。

2つめの事例は「摂食障害を主訴とする22歳の境界性人格障害の女性との心理治療過程」で、一つの「わたし」になっていくという視点のみでは読み解けないクライアントのありようを、心理療法ではどのように受け止めてゆくべきかという問題が考察された。心理療法家の治療観、世界観も問いなおさねばならないと論じられた。

3つめの事例は「激しい行動化を伴う側頭葉てんかんの20歳女性との心理治療過程」で、人の通常の生の連続性には属し得ない世界を生きなければならない病態のクライアントの世界観に、心理療法家はどのように関わるかが論じられた。

第4部は心理療法の「世界観」——心理療法はどこへ向かうかと題されて、2章よりなる。まず、厚みをもった社会的経験が喪失するとともに、生命の奥行きをもった体験が衰弱し、「生命からの離脱を引き起こす危機性」に瀕する現代人にとって、「世界観」はますます重要になってゆくであろうと述べられた。また、クライアントの生を形作る多様な物語の中で、そのクライアントとその心理療法家の間に生み出された語りが唯一無二のものである事の重要性について論じられている。クライアントの語りを受け止める態度にごまかしがないかという事、ひいては心理療法家自身が「心理療法家」という物語を含めてどのような「世界観」を生きているかということが問われていると強調された。そして著者の関心は、新たに壮大な「世界観」をつくることではなく、ひとりの人間がつくることのできる「世界観」とはいかに不完全なものであるかを知る「智慧」こそが、心理療法という営みの中で生じるクライアントと心理治療家の出会いをかけたえのないものとしてこの世に結びつけるのではないかと論じられた。

論文審査の結果の要旨

著者は心理療法に携わってきた中で、感じてきたこと、すなわち、心理臨床学はひとりの生きている人間の心理を対象としているため、いきている個人の主観を大切にす。また、現実世界で生きている事実も大切で、客観性や科学性と無縁ではないこと、その上で特に世界観を考へることが大切であることを主張した。著者が言う「世界観」とは、「人が自分の周囲の事物や出来事をどのように体験しているのか。また、それらの事象をどのようにして、自分が生きてゆく一つの世界にまとめあげているのか、世界をどのようにとらえ、意味づけて、理解するかという作業は人が生を営む上で不可欠のもの、」とする。すなわち、人がいかに生きるかということと「世界観」は表裏一体であるとする。このような「世界観」をテーマにした著者の意気込みは評価されたが、世界観ということこれまでさまざまな哲学者がテーマにしてきており、それとの比較などが重要になる。文献レビューで、少しは触れられているが、これだけでは不十分である。といて、今までの世界観にとらわれると、著者の主張したいことが損なわれる。この矛盾する中で、著者は今までの心理療法の研究ではあまり取り上げられなかった「世界観」をテーマとしたことは斬新であり、意欲は十分に認められると評価された。しかし、「世界観」と言いながら、クライアントの語る物語にとらわれて、「世界観」が物語研究になっているあいまいさがあるのは残念であると話し合われた。すなわち、クライアントが述べる表の事柄にとらわれすぎて、著者が感じたことや、クライアントが表側に述べきれない裏側がもう少し言語化できていたら、すばらしい論文になったであろう。これは著者の心理療法家としての能力の高さを認め、一般にむつかしい内的なことについてのさらなる言語化を求めたものであり、決して本論文の価値を低めるものではないと話し合われた。

著者は心理療法では「個々のクライアントの神話や物語が生まれ、生成していくこと。そしてそのことがクライアントの「世界観」を深い関係性の中で、取り戻せることにつながる」と述べる。そうした本論文のテーマが3事例を基に示されて

いるかが話し合われた。事例1はクライアントの「世界観」の変化が顕著である。自分に対してとか周りの人々への捉え方が変化していった、自分らしい自分を出せるようになった。セラピストの揺らぎは少なかった。事例2はクライアントの語りをセラピストがあまり感じとれないために、セラピストは非常に揺らがされた。セラピストの「世界観」が問題になったケースである。事例3はテンカン症による不意に襲ってくる発作のために、人間の力を超えたものが大きな要素にあり、このために、クライアントのつながらなさをセラピストがつけていった感じである。セラピストの力を超えているものが多く、「どうしようもなさ」すなわち、無力感を味あわされ続けたケースであった。

口頭審査においてはこれら3事例に共通するものとして「身体性」があるのではないかと話し合われた。すなわち、この「身体性」がセラピストとクライアントとの相互性を動かしたのではないかと指摘された。また、3事例は「深い関係性」の中で、セラピーが進行していくことがよく示されていると評価された。また、この中で、著者は想像力の役割が大きいと強調したが評者らも同意した。

「関係性が決める」ということはロジャーズ派とは違うセラピスト側に引き付けた観点であり、従来より一歩新しいものであることが評価された。このようなところや「世界観」というテーマで著者の心理療法を物語ったことはオリジナリティーがあると評価された。しかし、診断とか治療などは医学用語が用いられており、もう少し慎重でありたいと苦言があった。また、引用文の仕方や文献の挙げ方は少し古いと指摘された。しかし、これらは本論文の価値を決して損なうものではない。

本論文には著者の心理療法観および「世界観」が示されており、今まであまり触れられていない論文であり、本論文は高く評価できるとされた。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成17年9月21日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。